

図書館展示計画委員会報告

平成11年度は、総合図書館1階展示室において、春季から冬季に至る4回の展示をおこなった。

春季特別展

「聖書コレクション」

平成11年4月1日(木)~5月22日(土)

関西大学図書館は永遠のベストセラーと言われる聖書を、半世紀にわたって教派を越え収集してきた。今回、1500余点の中から代表的なもの約60点を展示した。

世界最小の旧新約英語聖書をはじめとした豆本類や総皮装丁のジェームス1世の欽定英訳の大型本、美術史上、注目されているバチカン所蔵の彩色絵入り写本。世界最初と推定されるポリグロト聖書『5ヶ国語対訳聖書詩篇』、旧約聖書のエチオピア詩篇を羊皮紙に手写した彩色絵入り写本、細密画を含む時祷書の零葉など色彩豊かな資料を集めた。世界各地の翻訳聖書としては、アマゾン源流地帯や北極圏の少数民族等の入手が難しいものや、幕末期の最古の邦訳新約聖書等を紹介した。15世紀に広く読まれた『キリストに倣いて』といったインキュナブラも参考出品した。

夏季展

「大阪の雑誌創刊号 明治期」

平成11年6月14日(月)~7月30日(金)

関西大学図書館は、特別コレクションとして明治・大正・昭和の3代にわたる大阪の作家、画家、芸能人などの作品を主内容とした「大阪文芸資料」を所蔵している。その総数は単行書約9,600冊、摺物約400点、雑誌約700タイトルにも上るが、本展示ではその中から明治期の雑誌創刊号を中心に約50点を展示した。

代表的なものとして、文芸雑誌ではまず、明治12年発行の『なにわそうだんよしあしぐさ浪華叢談兼葭具佐』、明治20年代以降の『百千鳥』、『葦分け船』、大阪朝日新聞社系の文士達が創刊した『なにはがた』とそれに対抗した大阪毎日新聞社系の『大阪文芸』、薄田泣菫の編集で知られる『小天地』や、日本で最初の少年誌として話題になった『ちゑのあけぼの』など。演劇雑誌では、中座、角の芝居など各座の芝居の筋書きや新狂言の紹介に始まる『しばいちんぼう劇場珍報』や、大阪の浮世絵師、長谷川貞信(二世)、小信(三世貞信)らの『芝居道楽』などのほか、参考出品として鮮やかな役者絵の摺物や歌舞伎役割番付なども紹介した。

秋季特別展

「作家の自筆展 上方文藝玉手箱」

平成11年10月4日(月)~11月13日(土)

記念講演会

「三島由紀夫初期作品の問題

川端康成との往復書簡を契機として」

吉田永宏 文学部教授

平成11年10月25日(月)

於：総合図書館3階図書館ホール

関西大学図書館が収集し所蔵する「大阪文芸資料」のうち、主として大正期・昭和期に活躍した大阪に縁の深い作家31名の自筆原稿を中心に書簡、色紙、書幅を加えた55点を展示した。

この特別展では最も古い人である上司小剣の代表作『鱧の皮』や、他の自筆原稿、短冊および書簡。開高健の名を一躍全国に知らしめた『パニック』の生原稿と当時の消息を伝える谷沢永一宛の書簡。直木三十五の絶筆『弘法大師』。田辺聖子の『求婚旅行』。織田作之助晩年の評論『大阪の可能性』、他。珍しい演劇脚本の原稿としては、関西大学の卒業生で演劇界の大御所であった北條秀司の『寝白粉』。また、梶井基次郎が朋友淀野隆三にあてた書簡など。

これら作家の肉筆にふれ、各々の作品から伝わる熱い想いを感じ取っていただけたものと思う。

冬季展

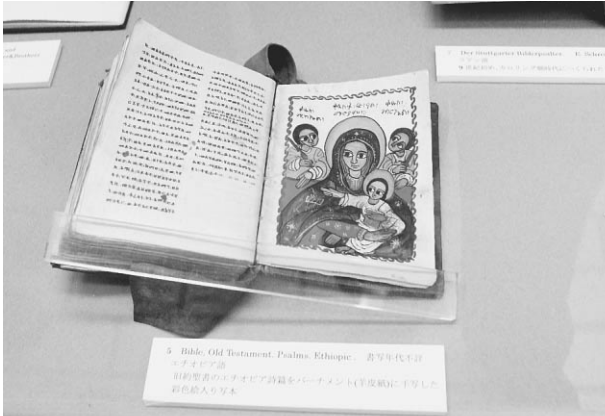
「この国の字書と辞書」

平成11年12月6日(月)~12年1月15日(土)

わが国の辞書のおこりは、今から一千年以上も昔のことである。その頃は、中国からもたらされた漢籍や仏典を読み解くための字書であり、それは一部の僧や学者のものであった。やがて鎌倉から室町へと時代がすすむと、歌学の隆盛により古語の解釈や用法を教示する歌語辞典があらわれた。また武士や庶民が日常使用する辞書も普及し始めた。出版文化全盛の江戸時代を迎え、その後期には、近代の辞書に近いものになってきた。

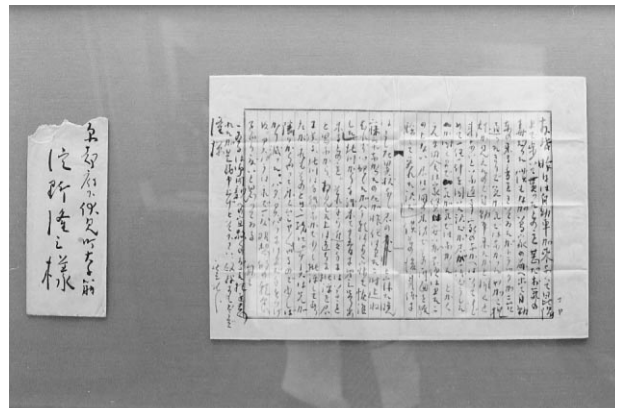
平安時代に成立した、最古の漢字字書『新撰字鏡』をはじめ、鎌倉時代の歌語辞典である『和歌色葉集』や『八雲御抄』。室町時代の部首分類の漢字字書『倭玉篇』。また江戸時代では貝原益軒の語源考察辞書『日本釋名』。そして近代においては広辞苑の前身『辞苑』など、時代をたどるように40余点を展示した。ことばと辞書のかかわりをみていただけたのではないかと思う。

春季特別展「聖書コレクション」



『旧約聖書 エチオピア詩篇』

秋季特別展 「作家の自筆展 上方文藝玉手箱」



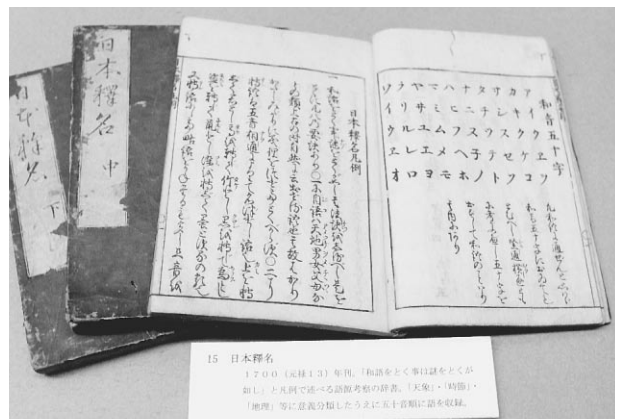
梶井基次郎 書簡

夏季展「大阪の雑誌創刊号 明治期」



『劇場珍報』

冬季展「この国の字書と辞書」



貝原益軒『日本釋名』